

まつ おかえり祭り

おかえり祭りが始まったのは約250～300年ほど前の江戸時代後期とされていますが、残念ながら、天保5年（1834）や安政5年（1858）の本吉大火で町のほとんどが焼失したため、藤塚神社にも記録がなく、正確なことはわかりません。

祭礼の1日目（神幸祭）は、町の南西にある藤塚神社本社より、青年団に担がれたお神輿が、旗手の合図とラッパ衆の吹奏により町内を巡行し、氏子の一軒一軒を家内安全・商売繁盛を祈願して練ります。各町内会や職能組合が管理する13基の台車がお神輿の先導役を務め、お神輿と共に町内を巡行し、当日夜、町の北東にあるお旅所（高浜）にお着きになり、翌日は朝から祭典が行なわれます。

2日目（還幸祭）は、先頭の今町の台車が出発するとそれに続き各台車が列をなし、その後お神輿がおかえり筋の男衆に担がれ、おかえり筋を通り、翌未明に藤塚神社本宮にお着きになり幕を閉じます。

お神輿を担ぐ青年団や台車の曳き手が、皆そろって紋付袴姿の正装をまとるのは、江戸末期の安政4年（1857）に京都の仁和寺（御室御所）より神輿の菊花紋章入り日覆を下賜されたことに敬意を表したものと言う人もいます。

北前船で栄えた当時の華やかさを残したおかえり祭りは、平成13年（2001）に石川県無形民俗文化財に指定されています。

【青年団のラッパ】

お祭り当日、ラッパの第一声が聞こえると始まりの合図となります。地元の人たちはこの音を聞くとさあ祭りだと自然に気持ちが高鳴ります。

おかえり祭りでラッパが吹かれるようになったのは、昭和初期に若者が数多く戦場へ赴き、景気をつけようという事から始まったといわれています。春先にラッパの練習の音色が夜に聞こえてくると、もうすぐお祭りだと人々に知らせる風物詩になっています。このように今ではお祭りにラッパの音色は欠かせません。

【おかえり筋】

2日目に通る道筋は全10町の内の1町だけを通り「おかえり筋」と呼ばれ、おかえり祭りの名の由来となっています。10年に一度だけ、神輿のおかえりで神様をお迎えすることから、家々の前では提灯がともされ、親戚・友人・知人など大勢の人々を招きもてなし、さらに神輿の担ぎ手や台車を曳く人々を家に招き入れるなどたいそう賑わいます。

10年に一度来るおかえり筋では、多くの家で畳を張り替えたり、改装したり、また料理も仕出屋さんからご膳をとったりと盛大にもてなしをします。

北前船で栄えた当時は、船主が、船乗りやお店の得意先の人を招いたり、玄關を開け放ち、誰彼となく人を招きいれて大盤振る舞いをしたそうですが、今では、普通の家では、親戚、友人、知人を招くだけのお宅が多いようです。

昭和の始めはおかえり筋で出された料理は、皿鉢料理といってご膳ではなく、深鉢にたけのこなどの旬の煮しめを盛っただけでした。それを各人が小皿にとって食べる程度でした。